

# 茶木田遺跡

—桂萱公民館の移転・新築に伴う埋蔵文化財確認調査報告—

1985

前橋市教育委員会



桂黃小学校 6 年生の見学

## 序

本市では、昭和58年7月に、市民団体、学識経験者等、幅広い市民の代表者の参画によって、「前橋市民憲章 市民の願い」を創定し、市民自らがめざす市民のあり方が焦点へとされてまいりました。また、同じ年の9月には、本市の生涯教育の将来的展望をなう提言が、前橋市社会教育委員会議の答申として出されました。このような流れの中で、地域文化の向上をめざす地区公民館の役割は、今まで以上に重要なものとなってまいりました。

桂萱公民館は、桂萱地区21町を対象に、地域の社会教育活動のかなめとして、さまざまな活動にとりくんでまいりました。しかし、現状の施設では、もはや市民のニーズにこたえることはできず、新公民館の建設が急務となっております。このような中で、新公民館予定地＝茶木田遺跡の確認調査が実施されました。

調査では、旧利根川の広瀬川低地帯に、奈良・平安時代の集落のあることが判明いたしました。桂萱地区の上泉には、律令時代の桂萱郷との言い伝えもあり、本調査結果には興味深いものがあります。今後、桂萱地区、ひいては前橋の歴史を知る上で貴重な資料となるものと思われます。

今回の調査では、上泉上地改良区をはじめ、さまざまな方々のご協力をいたしました。また、直接調査に参加された作業員の皆様のご協力なしには本調査の遂行はありませんでした。深く感謝申し上げます。

最後に、本報告書が地域の教材として活用され、無名の先人の足跡にふれるとともに、埋蔵文化財に対する理解を深めていただく一助になればさいわいと存じます。

昭和60年3月10日

前橋市教育委員会

教育長職務代理者 奈 良 三 郎

## 例　　言

1. 本書は、桂菴公民館の移転・新築に伴う確認調査報告書である。
2. 本遺跡は、前橋市上泉町141-3他4筆に所在し、本遺跡の略称は〔59D1〕とする。調査面積は900m<sup>2</sup>である。
3. 発掘調査は、前橋市教育委員会が実施し、調査及び事務には下記の者（社会教育課文化財保護係）が当たった。期間は昭和59年11月5日～昭和59年11月19日で、昭和60年1月9日～昭和60年1月11日に埋め戻した。

（事務）福田紀雄〔係長〕町川信之、中野和夫、諸田洋子  
（調査）井野修二、桑原昭、唐澤保之
4. 本書の編集・執筆は唐澤保之が当たったが、井野・桑原両名の全面的協力を得た。
5. 本遺跡の調査と整理作業をしていただいた方は、後付のとおりである。
6. 調査時には、上泉土地改良区に多大なご協力を得た。感謝の意を表する次第である。
7. 整理作業中に下記の方のご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

井上唯雄（群馬県教育委員会文化財保護課）、大江正行（群馬県埋蔵文化財センター）  
富澤敏弘（昭和村教育委員会）、欠部良明（東京国立博物館）
8. 関係図面及び遺物の保管は、前橋市教育委員会社会教育課が行っている。

## 凡　　例

1. 各遺構の略称は次の通りである。

H：土師器使用の竪穴式住居跡、D：土坑、I：井戸跡、P：柱穴状ピット、W：溝状遺構
2. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構： $\frac{1}{10}$  (竪穴式住居跡カマド： $\frac{1}{5}$ )、遺物： $\frac{1}{5}$ 、全体図 $\frac{1}{50}$ 、付図地層断面図： $\frac{1}{50}$
3. 遺構平面図及び文章中の方位は、全て真北を基準とする。
4. 本遺構の国家座標上の位置は、遺構全体図（折り込み）に示してある。
5. トレンチ名は、トレンチ番号に統けて使う場合は略号を使用する。 $\square 1\text{tr}$ 、 $2\text{tr}$ 。
6. 地層は付図の地層断面図に詳しいが、本文中ではそれを整理した「IV、基本上層」の層名で統一してある。
7. 本文中の「確認面」「検出面」は下記の通り使いわけている。

確認面：遺構が土層上で始めて確認できる面。　検出面：確認面下の調査面。
8. 遺物観察表では、土器のナデ調整は下記のように使いわけている。

横ナデ：ロクロを除く回転運動を利用のナデ。ナデ：回転運動を利用しない乱方向のナデ。  
ロクロナデ：ロクロ利用のナデ。ヘラナデ：ヘラ状工具利用のナデ。指ナデ：指によるナデ。
9. 地層断面の土色名及び土器類の色調名は、「新版標準土色帳」による。

## 目 次

序

例 言

凡 例

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の方法と遺跡の概要	4
IV. 基本上層	5
V. 遺構と遺物	6
1. 竪穴式住居跡	6
2. 井戸跡	12
3. 溝状遺構	13
4. 土 坑	13
5. 柱穴状ピット	13
6. 焼土遺構	14
7. トレンチ内出土遺物	14
VI. まとめ	15
1. 遺跡の立地	15
2. 竪穴式住居の年代	16
3. H-8号住居跡出土の縁軸陶器について	16
4. 本遺跡における古代集落の性格	17
5. 広瀬川低地帯の開発	17
図 版	18
遺跡全体図（折り込み）	

付図、トレンチ地層断面図

## I. 調査に至る経緯

生涯教育は、複雑・専門化した社会及び高齢化社会をむかえつつある我が国にとって、その重要性はかつてないものとなっている。前橋市では、昭和58年9月に前橋市教育委員会教育委員長の諮詢を受けて、今後の生涯教育のあり方を問う前橋市社会教育委員会議の答申が出された。このような流れの中で、地域と密接した地区公民館の役割は増々重要なものとなっている。

桂賀公民館は桂賀地区21町を対象にするが、当該地区は市街地に近接し、交通の便が良いため付近一帯の開発と人口増には目をみはるものがある。しかし、公民館は老朽化が激しく、施設等も不十分なため、地区住民のニーズに十分こたえられるものではなく、新公民館の建設を必要としていた。そこで、昭和59年度に土地の買収・造成、同60年度に新公民館の建築を目指して、本遺跡地がその対象となったものである。

用地の買収・造成は土地開発公社が行い、これを教育財産として教育委員会が買い取ることになるが、確認調査は土地開発公社の用地買収後の昭和59年11月5日から実施したものである。

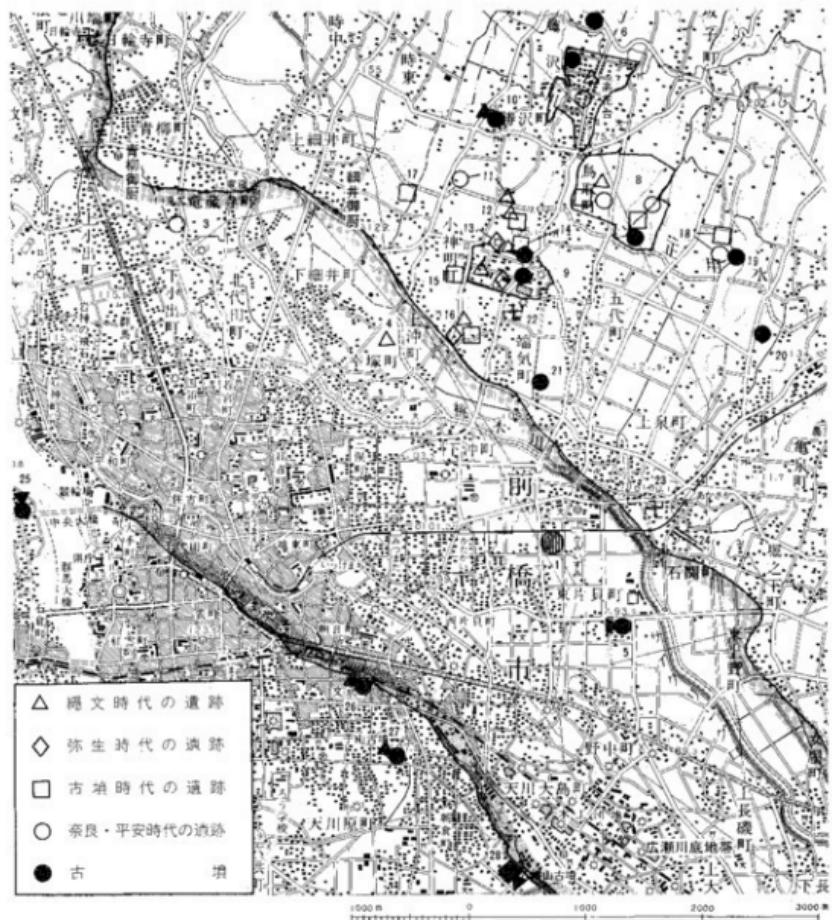
## II. 遺跡の位置と環境

前橋市は関東平野の北部に位置し、北の赤城山・西の榛名山、そしてその間ににある子持・小野子山に抱かれ、南に広々とした関東平野を望む。奥利根川に発する利根川は市内を南流し、そこから分かれる広瀬川、桃木川とともに、前橋を潤いのある町にしている。

前橋市域を地形及び地質の特徴から区分すると、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地(前橋台地)、両者にはさまれた地溝状の一段低い沖積低地(広瀬川低地帯)の3地域に区分できる。本遺跡の所在する広瀬川低地帯は約2.5~3kmの幅で前橋市の北西部から南東部に帶状にのびており、表層は過去の利根川の氾濫原堆積物である沖積砂礫からなっている。今は前橋台地を流れる利根川も、かつてはここを流れ、広瀬川低地帯を形成したものである。<sup>(1)</sup>

茶木田遺跡は前橋市上泉町141-3他4筆に所在し、広瀬川低地帯の北岸寄りに立地する。本遺跡の北を東流する桃木川は、北東約600mで藤沢川を合流して向きをかえ、本遺跡の西約600mを南東流する。本遺跡の北に接しては上毛電鉄の線路が走り、更にその北には桂賀小・中学校がある。付近一帯の現状は西の桃木川に向かう緩傾斜の水田地になっているが、これは昭和34年から同40年に実施された前橋東部土地改良事業の結果である。それ以前は、本遺跡地付近から、周囲を水田に囲まれた帶状の桑畠が南東方向に続いており、本遺跡はその北端に位置していた。この桑畠は微高地と考えられ、三俣、東・西片貝、野中町等の旧集落は同様な所に立地する。本遺跡地の標高は、現状で96.7~96.8mである。

周囲の歴史的環境をみると、赤城山南麓では縄文時代から平安時代まで各種の遺跡が連続と続いている。中世以降でも、仁治4年(1243)銘のある善勝寺鐵造阿弥陀如来坐像(22、小坂子町出土と伝承される)、康永第四年(1345)銘のある宝禪寺異型板碑(23)、女堀(24)、多数の城跡



第1図 遺跡位置図

1	若木田遺跡	7	若賀北部出土地遺跡	13	食本須賀	19	椿峰吉塙	25	土山古墳
2	日輪寺	8	若賀東部出土地遺跡	14	西山須賀	20	新田冢古墳	26	不二山古墳
3	青柳若庵遺跡	9	若賀西部出土地遺跡	15	人明神遺跡	21	大日冢古墳	27	二子山古墳
4	西町井遺跡	10	オブ原古墳	16	鷲久須賀	22	美勢寺	28	八幡山古墳
5	大塚古墳	11	小神明遺跡!	17	東山之口遺跡	23	宝神寺		
6	東会津吉塙	12	丸野遺跡	18	樺峯遺跡	24	衣御塙		

第1表 周辺の遺跡一覧表

等があり、今に至っている。地形、水の便、日照時間等からみても、居住の最適地である。

一方、旧利根川左岸の前橋台地では、かつてはほぼ全面が条里で区画され、最近の調査ではそこから浅間山B輕石に埋没した水田の検出が続いている。<sup>(6)</sup>また、古墳時代から平安時代の住居跡も各所で検出されている。<sup>(7)</sup>広瀬川低地帯沿いの前橋台地縁辺部には、濃密な古墳群や大型古墳（25～28）が分布する。この前橋台地では、国府、国分寺、山王庵寺を始めとして、弘仁年中に名僧徳一が開いたと伝える上佐鳥町西光寺、その近くにある春日神社、六供町に地名を残す京安寺等があり、古代の中心地域の様相を呈している。

本遺跡の立地する広瀬川低地帯でも近年の各種開発やそれに伴う発掘調査により、原始・古代のようすが徐々に解明されつつある。縄文時代の遺跡には、群馬大学付属中学校の移転、新築に伴い耳飾100個体余り出土して注目された、堀之内II式～千網式期の西新井遺跡（4）があるが、出土状況は明確でない。弥生時代の遺跡は不明であるが、古墳時代になると広瀬川低地帯にも古墳が出現する。昭和10年調査の「上毛古墳綜覧」によると、広瀬川低地帯に所在する本遺跡地付近の古墳として、三俣1、上沖3、下沖1、西片貝5、東片貝1、上泉1の計12基が登録されている。この中には上沖町1、西片貝町2の前方後円墳が含まれている。東片貝町片貝神社に現存する大塚古墳（5）は、紡錘状角閃石安山岩使用の横穴式石室を持つ前方後円墳で、今にその威容を伝



第2図 遺跡地現況図

えている。この後は、10世紀後半～11世紀前半代の集落跡の発見された青柳寄居遺跡（3）まで、その間を埋める遺跡はみつかっていない。なお、青柳寄居遺跡の西北方の日輪寺には、平安時代後期の鉢形十一面觀音像を今に伝え注目される。以上の外に、広瀬川低地帯にかかるものとして、若宮町の群馬大学付属小学校校舎改築の際、その敷地下から出土した土師器（川のふちに流されて沈殿していた状態であるという）、上記片貝神社の東北地帯で土地改良の際の土師器の出土（地下2mの粘土厚層の下部出土）等があり、三俣町の上毛電鉄三俣駅付近の畠や、片貝神社北西の人家密集地等に、濃密な遺物（主に平安時代の土師器）の散布がみられる。

中世に入ると、南北朝時代の「長樂寺文書」や「彦部文書」に、大胡郷内の村として、野中村、神塚村、三俣村、上浪村、堰口村、宇坪井村、長安村、小星原村、今井村、大鳴村、片貝村、小鳴田村が現われ、本遺跡地もこの時代には大胡郷に所属していたものとみられる。また、延文5年（1360）成立の「神鳳抄」には青柳御厨と細井御厨があり、それぞれ青柳町、上・下細井町周辺に比定されている。両御厨の成立は12世紀代とも考えられており、比定地の一部は広瀬川低地帯を含む。青柳寄居遺跡や本遺跡は、両御厨の成立年代とも近接し、共通した立地を持つ点でも注目される。

本遺跡は奈良時代から中世にわたる複合遺跡である。広瀬川低地帯の開発と利根川の偏流は今後に残されている課題であるが、本遺跡はこの解明に一歩近づく資料となるであろう。

### III. 調査の方法と遺跡の概要

確認調査は昭和59年11月5日に開始した。調査区域内には遺物が全く散布しないため、調査はトレチ方式を探用し、建物敷地下には約5m間隔で、盛土予定の庭・駐車場部分には20m間隔で設定し、前者に確認された遺構のみ掘り上げることにした。トレチの掘削は、担当者の立ち合いのもとに、0.4m<sup>2</sup>のバックフォーを使用して遺構確認面まで掘り下げた。これと平行して、1・3・5・7～11tr地層断面の実測・写真撮影を行った。この結果確認された遺構は、奈良～平安時代の堅穴式住居跡10、溝状遺構2、焼土遺構1、土坑4、柱穴状ピット7、中世のものは井戸跡1、溝状遺構1、柱穴状ピット1があった。出土した遺物も遺構の時期に対応するもののみで、绳文・弥生・古墳時代及び近世以降のものは全くなかった。上記方針により掘り上げた遺構は、堅穴式住居跡1、溝状3、井戸跡1、土坑4、柱穴状ピット7、焼土遺構1の計17遺構である。なお、10tr西側と11tr全面には浅間B軽石の堆積があるので、断面及び平面で水田の有無を検討したが、トレチ内では確認されなかった（11trの掘り下げのみB軽石に覆われた面で終了している）。調査は昭和59年11月19日に終了し、埋めもどしを翌年の1月9～11日に行なった。埋めもどしの際には、土坑・ピット群の北限を井戸跡との間に探り、4～5tr間にも更にもう1本のトレチを入れて井戸北側の遺構の有無を再確認したが、両者とも新たな遺構の検出はみなかった。

なお、本遺跡は土層のあり方から南東方向にのびる細長い微高地帯の北端に立地するものと推定されたが、これについては、「IV、基本土層」を参照されたい。

## IV. 基本土層

本遺跡地の土層全体については付図に詳しいが、基本的な土層を模式図に表わしたもののが第3図である。この土層の特徴及び各トレンチ内での各土層の有無は第2表に示した。以下、これらの資料に基づき、本遺跡地の土層及び地形上の特色の概要を列記する。

- (1). 本遺跡地は、その基礎を河川堆積によるVI~VII層に置く。また、周辺一帯は、昭和30年代に土地改良事業が実施されたが、その際の削平は一部の高地を除きI層乃至II層上半に留る。
- (2). II-3~5層を残す所は低地、残きない所は微高地であったと推測され、上記土地改良事業でも後者で削平が深く、豊穴式住居跡以下の遺構も主に後者から確認された。
- (3). 微高地部分では、V層(古墳時代以前)以降に河川の氾濫を受けた形跡は全くなく、安定した土地であったとみられる(但し、新しいものは土地改良で削平された可能性もある)。
- (4). II-3~5層をきれいに残す11trは、その西端の深掘りによると、IV層の時代に低湿地の様相をなし、微高地V層の安定した時代にもVI層のシルトが厚く堆積している。
- (5). 本遺跡は、土層のあり方から、周囲を低地または低湿地に囲まれた微高地の北端に立地する。また、この微高地は帶状に南東方向に更に続くものと推測される。
- (6). 遺構と覆土の関係は次の通りである。II-1・2層を覆土とするもの……井戸跡、溝状遺構、柱穴状ビット、III層を覆土とするもの……豊穴式住居跡、溝状遺構、土坑、柱穴状ビット他。

層	特徴	厚さ (cm)	トレンチ											地形との 関係
			1	3	5	7	8	9	10	11	—	—	—	
I	水田耕作上	10~15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全面
	木田不透水層	5~15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全面
II	B種石を含む層	各層15~30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	低地傾向
	B種石純層又は近いもの	各層5~10 前後	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	低地ないし低湿地
III	B種石隣接下面の細 砂色土、二ツ面系 砂石土	10~20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	低地と 低湿地 にない
	C種石多量の黒 色土、二ツ面系 砂石土	15~20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	低地ないし 低湿地
IV	C種石のほとんど 含まれない黒褐色土	20~30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	低地
	砂疊	10~15 (未標)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全面
V	砂疊(河川堆積)	15~30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全面か
VI	砂疊	10~15 (未標)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全面か

1. ○はそのトレンチに該当の土層があることを示す。×はなし、/(斜線)は未調査。

2. (跡東)、(跡西)、(跡中)は、東端、西端又は中央部に該当の土層がないことを示す。(跡所)は、一部の所で該当の土層がないこと。

3. 各層は更に細分されるが、それについては付図参照。

第3図 基本土層模式図

第2表 基本土層説明

## V. 遺構と遺物

### 1. 竪穴式住居跡

#### H-1号住居跡

10trの中央やや東寄りに位置する。西に隣接してH-6・7号住居跡があり、本遺構周辺は住居跡の密集地帯ともみられる。住居跡はIV層上面で確認され、覆土はIII層に置く。東西規模は最大3.1mを測るが、南北は不明である。建物敷地外に位置するため完掘せず、トレンチ内の確認のみにとどめた。遺物の出土は全くないため、本住居跡の時期は不明であるが、隣接するH-6・7号住居跡、10tr内出土遺物、及び覆土から判断して、奈良時代～平安時代のものであろう。

本遺構の確認された10tr西端の土層は、低湿地の様相を呈する11tr西端と共に通しているので、本トレンチでは、H-1・6・7号住居跡付近が、遺構分布の西限とみられる。

#### H-2号住居跡

7tr中央部付近に位置する。東西規模は最大2.5mを測る。南北はそれぞれの壁がトレンチ外にあるため不明である。調査は、本住居跡が建物敷地外にあるためトレンチ内の確認のみに留めたが、概して小柄な住居跡とみられる。遺構確認面はIV層上面で、III層を覆土とする。壁高は35cm以上ある。北側に隣接して確認されたH-8～10号住居跡と、規模・壁走向の共通性、及び位置関係からみて、同一の小住居群（単位集団）を構成するものとも考えられる。出土遺物は全くないが、上記の隣接する各住居跡、及び本住居外のトレンチ出土遺物から判断して、10世紀初頭～10世紀中頃にかけての住居跡と推定される。

#### H-3号住居跡

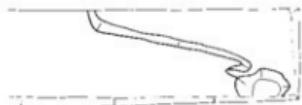
8tr西端で、住居跡北壁付近の東半部分が確認された。この辺りは、遺跡の立地する微高地でも最高所部分とみられ、深くV層まで後世の削平を受けており、VI層で初めて本住居跡が確認さ

L=96.90m



- a. III-2層そのもの。
- b. IV-1層小アロック5%、2~4cm前後の小塊(板石)1%を混ぜる。
- c. VI-1層のシルト状を全体に含む。

覆土は全てIV-2層に属するもので色調も同じ(付図注記参照)。



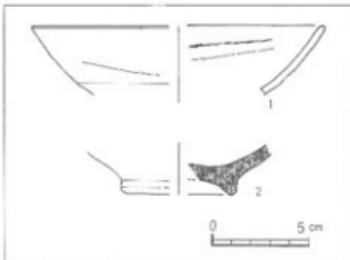
0 2 m

第4図 H-3号住居跡

れた。覆土はⅢ層に包括されるもので、この中からH-8号住居跡と同じ様相の土器片が若干量出土した。住居跡床面は10~20cmの転石が露出するⅧ層地山面におき、かなり凹凸の激しいものであった。住居北壁にかかる、住居跡と同じ覆土を持つピットが検出されたが、今回の調査では両者の関係は不明である。このピットは住居跡床面から深さ13cmを測る。壁下に周溝は認められなかった。本住居跡は、構造及び遺物相からH-8号住居跡と同じ頃のものであろう。

#### H-4号住居跡

8tr東側で住居跡の南西隅が確認された。確認面はⅣ層(Ⅴ層の性格強)上面で、Ⅲ層を覆土とする。壁長はトレンチ内で南壁1.8m、西壁1.2m、深さ20cmを測るが、確認はトレンチ内に留めている。遺物は1が覆土中から出土しただけで、2は本住居跡付近の出土である。1は東濃系の大原2号窯式に該当し、10世紀後半代のものと考えられる。



第5図 H-4号住居跡出土遺物  
(法量単位: cm)

番号	特徴	法量(①器内②口径③底径)	性 法 等	胎 土	①色調②後成③残存④出土位置⑤参考
1	灰 稲 鏡	①3.6cm(残存部) ②15.5cm(後元)	(内外面)ロフロナデ 内面口縁部に直ね模様。	緻密。d0.5mm 黒色 粒子若干。	①灰白色②非常に幾曲③20cm④覆土⑤薄け 掛け、胎は光沢のある丸白。
2	須毛器 高台器	①2.7cm(残存部) ②不明 ③6.1cm(高台)	(内外面)横ナデ。付高台。施毛はてい ない。底部の切落し・調整不明。	d1mmの後燃砂や や多量。	①(外面)灰質色、(内面・器内)に深い褐色 ②焼化ガム③30cm④H-4付近。

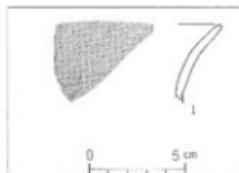
第3表 H-4号住居跡出土遺物観察表

#### H-5号住居跡

9tr西側で、住居跡中央付近をトレンチが横断する形で確認された。東西規模は2.35mを測るが、南北は不明である。建物敷地外のためトレンチ内の確認に留めている。確認面はV層で、Ⅲ層を覆土とする。本住居跡の周辺は、原地形の微高地では最高所とみられ、耕作土(I層)の下はすぐV層乃至Ⅷ層となる所もある。本住居跡にかかる遺物は全くないが、周囲で確認された住居跡からみて、奈良時代~平安時代のものであろう。

#### H-6号住居跡

10tr中央部に位置する。南0.9mにH-7号住居跡、東1mにH-1号住居跡がある。確認面はⅣ層上面で、Ⅲ層を覆土とする。確認された南東隅は鋭角で問題を残すが、調査はトレンチ内の確認のみに留めた。遺物は覆土中の土器器腹口縁部1点だけで、8世紀後半の特色を持つ。本住居跡はやや大型ともみられる。



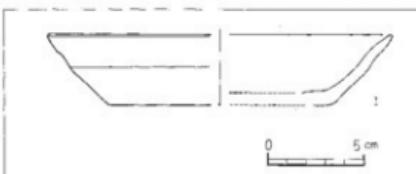
第6図 H-6号住居跡出土遺物

番号	特徴	法量(①器内②口径③底径)	性 法 等	胎 土	①色調②後成③残存④出土位置⑤参考
1	土器器 腹	①3.6cm(口縁残存部) ②③不明	(外面)へラ状工具による横ナデ。 口縁部横ナデ。(内面)横ナデ。	d0.5mm細砂多量。	①に深い褐色②良好③口縁部7.5%④覆土

第4表 H-6号住居跡出土遺物観察表

## H-7号住居跡

10tr中央部に、H-1・6号住居跡と近接して、北西隅を確認した。位置的にみてH-6号住居跡と同時存在ではない。造構確認面はⅢ層で、覆土もⅢ層を主体に置く。調査はトレーンチ内での確認のみであるが、やや大型傾向が窺える。H-6号住居跡とは、壁の走向、規模等に類似点がある。遺物は覆土中の1片であるが、奈良時代前半のものであろう。



第7図 H-7号住居跡出土遺物

(法量単位: cm)

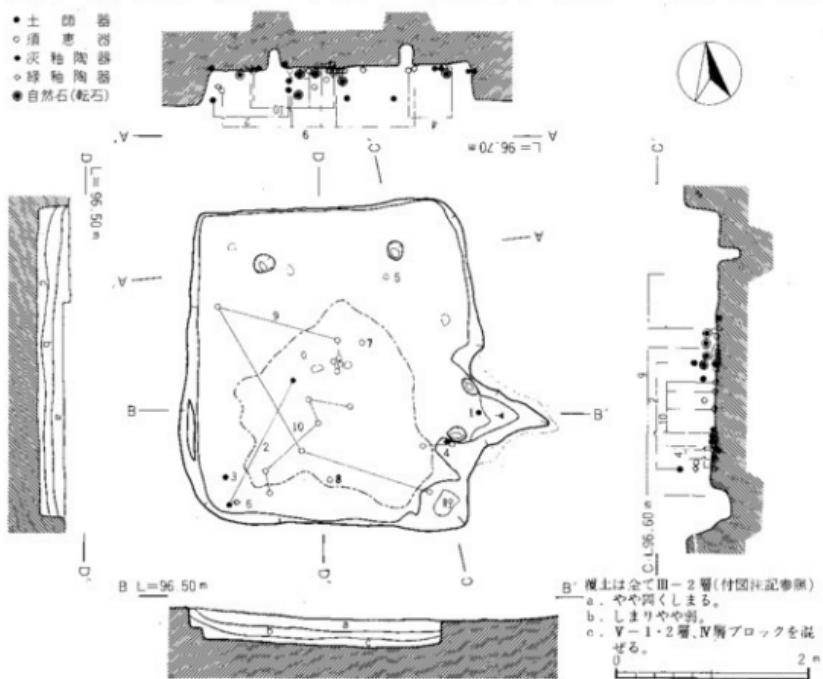
番号	器種	法量(①表面②内部)	性状	地	土	備考
1	土器 杯 (復元)	①0.7 ②18(復元) ③0.7	(外側) 体部上半部ナデ。岡下半断によ る復元。(底部・内部) 焼もう。	表面、φ 2 mm 長石長平。	①底色②赤黄含20%③灰土④内外全体に 焼もう。非常にていねいなつくり。	

第5表 H-7号住居跡出土遺物観察表

## H-8号住居跡

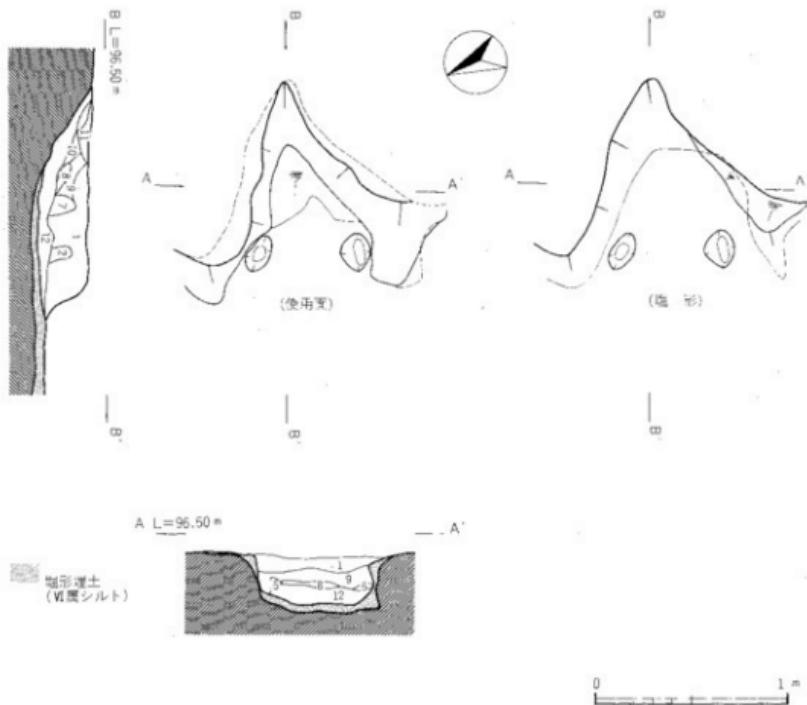
6～7tr間西端の建物敷地下南西隅に位置するため完掘した。検出作業はⅣ層上面で行った。住居跡の規模は検出面で南北3.46m、東西3.14mを測る長方形で、壁高は35cm前後である。面積

- 土器
- 須恵器
- 次輪陶器
- 緑釉陶器
- 自然石(軽石)

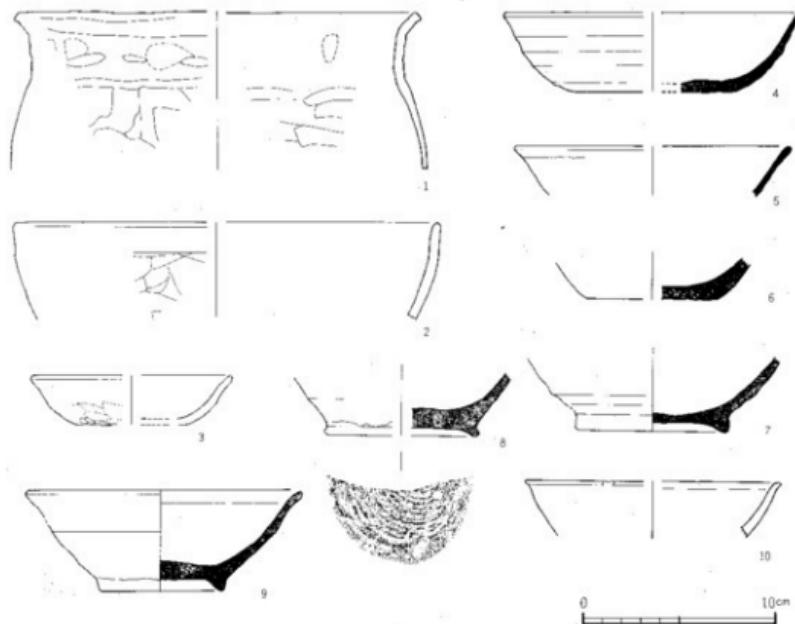


第8図 H-8号住居跡

は床面で  $8.7\text{m}^2$  (検出面で  $9.6\text{m}^2$ ) である。壁は南壁と西壁は直交関係にあるが、北壁は西壁と鈍角をなし、南壁東端より 40m 手前で東壁と交わる。東壁北側はここに向けてゆるやかな弧を描く。方位は長軸方向で  $N - 8^\circ - E$  を測るが、西壁を基準にすれば  $N - 9.6^\circ - E$  である。西壁南寄りでは、床面から 15cm の所に階段状の平坦面を持つ。床面は VI 層中乃至同上面をそのまま床としていた。カマド前の床面南半部は固く踏み締められており、このことから南壁又は西壁南側に出入り口が想定される。柱穴とみられるビットは北壁寄りに、ほぼ対角線上に 2ヶ検出された。径 20cm 前後、深さ 18cm の円形で、ビットの心々距離は 137cm を測る。南東隅には深さ 18cm の不整形の貯蔵穴が検出された。カマドは東壁南寄りに、中軸線西側をやや北に向けて設置する。袖部は地山を掘り残しており、その内側に石を据えた痕跡とみられる深さ 3 ~ 8 cm の浅いビットが検出された。カマドは掘形に VI 層のシルトを貼って構築している。遺物は大部分が覆土中とみられ、中でも南西隅付近で床面から 14cm 浮いて出土した綠釉陶器片は注目される。



第9図 H-8号住居跡 カマド



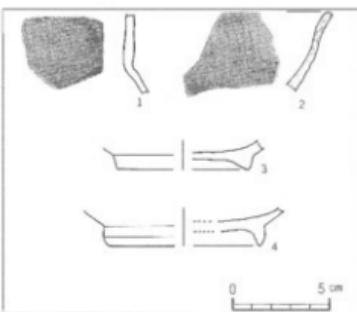
第10図 H-8号住居跡出土遺物

番号	器種	法形①(縁内)②(底内)③(底外)	性 法 学	胎 土	(測量単位: cm)		
					①色調②被成③堆積④土位高⑤備考		
1	土器器 裏	①8.3(残存高) ②21.2(復元) ③不明	(外周)口縁横位ヘラナデ。肩縁位ヘラ 削。内面)口縁横ナデ。肩縁位ヘラナデ 等。	細密。φ0.1~0.3 =繊維少量。	①に深い褐色②厚壁③内縫~肩部30% ④No.32		
2	土器器 縁	①6.1(残存高) ②23.0(復元) ③不明	(外周)口縁横ナデ。体部指揮え。 (内部)縁ナデ。	φ0.1~0.3白色 粘土多量。	①赤茶褐色②堅壁③体部7%④No.1~16 ⑤口縁削れ口に斑点状褐色付着物。		
3	土器器 縁	①2.6 ②10.6(復元) ③8.0(復元)	(外周)口縁横ナデ。体部指揮え。 底部不定刃ヘラ削。(内部)縁ナデ。	φ1mm粗砂や砂 粘土多量。	①褐と褐色②やや堅壁③体部10%④No.3 ⑤外縁のつくりはやや粗雑。		
4	直筒鋸 縁	①4.2 ②15.4(復元) ③8.3(復元)	(外周)ロクロ直筒鋸。底部凹凸削り 無調整。(内部)縁ナデ。	φ0.1~0.5mm黒茶 色泥状粒子。	①灰白色②軟質③底30%④No.13+ No.35⑤ロクロ直筒鋸。外周口縁削れ。		
5	直筒鋸 底成形	①2.6(残存高) ②14.4(復元) ③不明	(外周)腹ナデ。内外周とも腰もう。 内面は半浮傾向。	φ0.1~0.3mm繊維 多量。	①灰白色②軟質③底15%④No.27		
6	直筒鋸 底成形	①2.2(残存高) ②不明 ③8.8(復元)	(外周)胎板余切り無調整。他は、内外 周とも腰もうが激しく不明。	φ0.1~0.3mm白色 繊維多量。	①灰白色②軟質③底25%④No.24⑤表面に 細かい気泡状の穴。ロクロ直筒鋸。		
7	直筒鋸 高台削	①3.8(残存高) ②不明 ③8.2(高台、復元)	(外周)体部ロクロ削。底部凹凸削り無 調整。(内部)縁ナデ。	表面状加色繊維多 量。	①淡黄色②軟質、酸化皮③底成都~体部60% ④No.4~6~9~12~13⑤高台削、縁削れ。		
8	直筒鋸 高台削	①3.0(残存高) ②不明 ③8.0(高台、復元)	(外周)体部落削ナデ。底部凹凸削り無 調整。(内部)縁ナデ。付高さ。	φ0.1~0.3mm白色 繊維多量。	①60%にぶ、褐色地灰色②褐色・酸化皮 ③底~体部30%④No.10⑤ロクロロクロ(4)。		
9	直筒鋸 高台削	①3.4 ②14.3(復元) ③6.6 ④高台削	(外周)体部落削ナデ。底部凹凸削り無 調整。(内部)縁ナデ。付高さ。	φ0.1~0.3mm繊維 多量。	①に深い褐色②やや軟質③底60%④No.8~ 18~20~22~23~28~31⑤ロクロ有調整。		
10	縁 壁 縁	①2.9(残存高) ②13.6(復元) ③不明	内外全周に施塗。厚くていいね。全面 に非常に細かい質入。模様。	細密。	①灰白色(胎土)②非常に堅壁③体部20% ④No.2⑤法法等の痕跡。		

第6表 H-8号住居跡出土遺物観察表

## H-9号住居跡

6～7tの拡張に伴い建物敷地外に確認された。掘り下げはしていない。検出面はIV層で、東西3m、南北4mを測る小型の住居跡である。四壁は胴張り状の膨みを持つ隅丸長方形で、カマドは東壁中央や南寄りに付設する。壁の走向・規模及び位置的関係から、H-2・8・10号住居跡と小住居群（単位集団）を構成するものともみられる。遺物は覆土中（検出面での）ものであるが、その内容はH-8号住居跡と似た内容を持つ。4の灰釉陶器はやや後出的な存在を示すものともみられる。



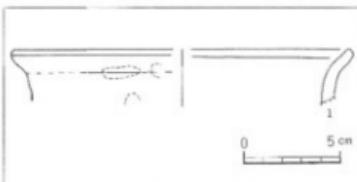
第11図 H-9号住居跡出土 I: 遺物

(法量単位: cm)						
番号	器種	法量(①部高②口径③底径)	技 法 等	胎 土	①色調②焼成③残存④出土位置⑤備考	
1	土器器 裏	①4.2(口縫部残存高) ②不明	(外縫)口縫張テ、肩痕部へラ削。 (内縫)口縫張ナダ、肩へラナダ。	φ0.5cm以内細砂 多量。	①褐色②灰質③底部5%④覆土⑤コ字底は 鉢底。	
2	灰釉器 碗	①4.2(体部残存高) ②不明	(外縫)弱いコロ目を残す。全体に横 ナダか。(内縫)横ナダ。	φ0.1～0.3白色 砂粒多量。	①にい褐色②灰質。器内中心部を除き酸 化灰焼成③底部15%④覆土	
3	土器器 高台型	①1.5(残存高) ②不明 ③6.5(高台、復元)	(外縫)底部中央不定方向へラ削り。 (内縫)横凸。	φ0.1～0.3細砂多 量。	①にい褐色②かなり色濃③底部30% ④覆土⑤色調・焼成は完全な土器器	
4	灰 陶 高台型	①2.0(残存高) ②不明 ③7.5(高台、復元)	(外縫)体部コロナダか。底部外縫 切り離し、溝無不明。付高台。	緻密。φ0.1～1mm 砂粒少量。	①灰白色②非常に堅緻③底部25%④覆土 ⑤残存部無施釉。内側に重ね施釉	

第7表 H-9号住居跡出土遺物観察表

## H-10号住居跡

5～7tにわたる拡張区で確認されたが、建物敷地外であるため掘り下げを行っていない、南北のH-9号住居跡及び土坑・柱穴状ピット群と近接する。検出面はV層中で、田層を覆土とする。形状は東西・南北とも3.7mを測る隅丸台形で、東壁の中央や南寄りにカマドを付設する。カマドの構築に当っては、VI層のシルト層の利用が窺えた。遺物は検出面覆土中のもので、右図の土器器裏片が中心である。これは退化傾向にある「コ」字状口縫器で、10世紀前半頃のものであろう。



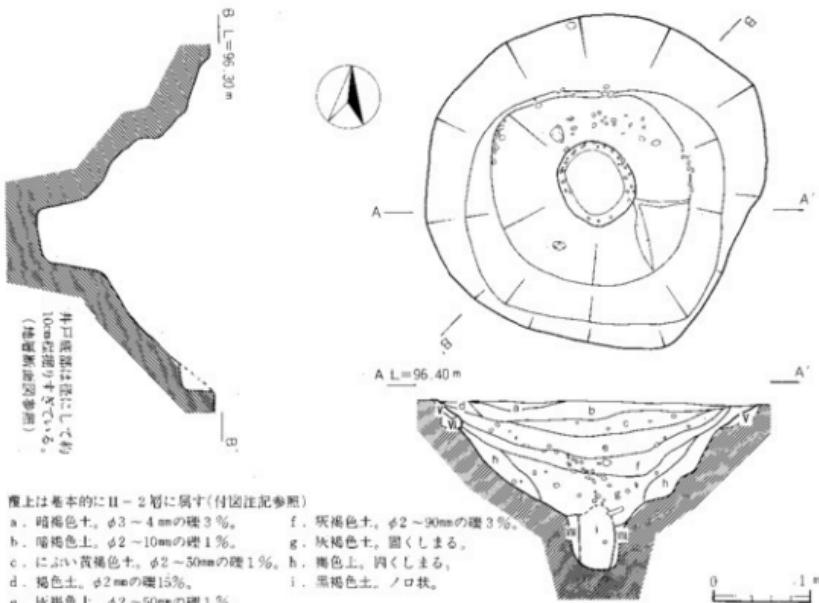
第12図 H-10号住居跡出土遺物

(法量単位: cm)						
番号	器種	法量(①部高②口径③底径)	技 法 等	胎 土	①色調②焼成③残存④出土位置⑤備考	
1	土器器 裏	①3.0(口縫部残存高) ②17.8(復元) ③不明	(外縫)横ナダ後指を当て口縫張部の折 り上げ。(内縫)横ナダ。	φ0.5cm白色砂 多量。	①黒褐色②やや軟質③口縫部10%④No.4 ⑤器内が厚く、崩れかけたコ字口縫	

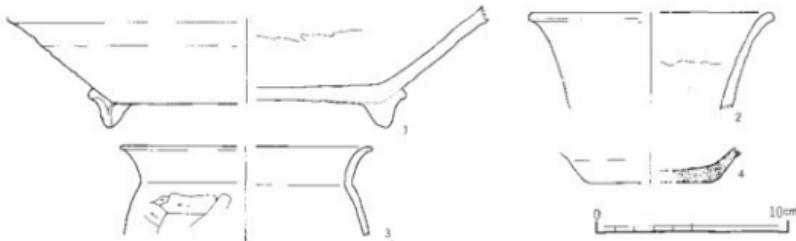
第8表 H-10号住居跡出土遺物観察表

## 2. 井戸跡

井戸跡は5~6 tr間の中央部で検出された。平面は円形でラッパ状の断面を呈す。検出面はV屑中におくが、この面で上端径3.3m前後、下端径50cm前後、深さ1.75mを測る。下端から上70cmまで円形の木製井戸枠の痕跡が認められた。復元径は45cm前後である。井戸枠と掘形下端径はほぼ等しく、枠は地山に接していた。覆土はB軽石を含んでおり、II-2層に包括される自然堆積土である。調査時には井戸内の湧水はなかった。覆土中からは若干の陶器等が出土している。



第13図 I-1号井戸跡



第14図 I-1号井戸跡出土遺物

番号	器種	法量(①高さ②口径③底径)	技 法 等	胎 土	(法量単位: cm)	
					④色調	⑤底面
1	陶器 香炉	①5.5cm(残存高) ②不明 ③14cm(復元)	(外側)施釉部顯著なクロ目。他刷毛 ヘラ彫り。(内側)ロクロナゲ、底足1現 存。底先(内側)凹面状。	緻密。#0.1~ #0.3mm白色細砂。	①灰白色・黄褐色のみ。②非常に單純。 ③灰褐色のみ。④底土⑤底面綠色灰地、ハケ等。 セラフ右側面。	
2	陶器 瓶	①5.1cm(残存高) ②12.7cm(復元) ③不明	(内外面)ロクロナゲ	緻密。底り物は2と んどなし。	①灰白色・赤褐色に變化②口縁部20%③腹上 部淡緑色灰地。	
3	土師器 小型壺	①4.7cm(残存高) ②13.2cm(復元) ③不明	(外側)U彫模ナゲ、肩横位ヘラ彫り (内側)ロクロナゲ、肩ヘラナゲ	#0.5~1mm的粒 多量。	①にふい赤褐色②やや軟質③口縁部20% ④底土⑤内外若表面に剥落。	
4	漆器器 杯	①1.7cm(残存高) ②不明 ③0.4cm(復元)	(外側)体部ナゲ、底底圓板系切り無 調整(内側)楕ナゲ	#0.5~1mm細砂。	①灰色②比較的堅硬③底~体部10%④底土 ⑤ロクロ右斜面。	

第9表 I 1号井戸跡出土遺物観察表

### 3. 溝状遺跡

本調査では3条確認された。その概要は下表のとおりである。これを覆土によって時期を推定するとW-1・2号溝は竪穴式住居跡と、W-3号溝は井戸跡と同じ頃のものである。いずれも遺物は少なく、性格も明確でない。しかし、W-3号溝は井戸跡付近で始まり、南側は低湿地の方に向て続いていることは注目される。3者とも特に水の流れた形跡はなかった。

溝番号	延 長	幅	深 さ	位 置	確認量	覆 土	断面の形状	備 考
1	7.3m前後	最大80cm (検出面)	22cm (検出面)	5~7tr間	N層 (検出面)	Ⅲ層	▽	
2	5m前後	最大46cm (検出面)	10cm (検出面)	5~6tr間	N層 (検出面)	Ⅲ層	▽	
3	23m以上	1.45~3.45m	26~42cm	2~9tr間	Ⅲ層上面	Ⅱ~Ⅲ層	▽	北端で溝幅が広がる。 南側は調査区域外に延びる。

第10表 溝状遺構一覧表

### 4. 土 坑

5~6tr間西端で1、6~7tr間中央部3の計4が検出された。前者(D-1)の規模は検出面で102×62cm、深さ43cmの長円形で、底面から6cm浮いて転石と土師器底の小片が出土した。後者は柱穴状ピットとともに群をなしており、このうち比較的大きいものを土坑とした。規模は検出面でD-2、85×63cm、深さ20cm、D-3、81×75cm、深さ12cm、D-4、61×65cm、深さ18cmである。土坑は全てⅢ層を覆土とし、住居跡と同じにするが、性格は不明である。

### 5. 柱穴状ピット

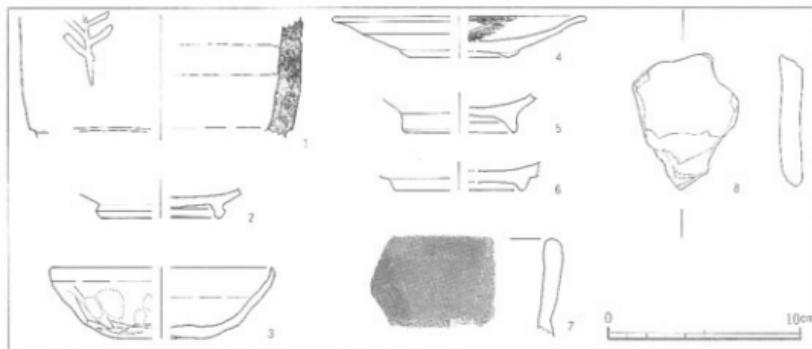
3群が確認された。第1群(P-1・2)は5tr西端で確認された。北と南の拡張部では確認されなかった。第2群(P-3~7)は6~7tr間中央部で土坑と群をなして確認された。土坑が柱穴の一部としても、建物に組めるものはなかった。群3群(P-8)は7tr東側で確認された。これらのピットの規模は径25~30cm前後、深さ20~53cmの円形である。また、第2群のP-7のII~2層を除き他はⅢ層を覆土としており、竪穴式住居跡と平行する時期のものとみられる。今回、建物B乃至櫛に認定できたものはないが、未調査区域に注意すべきであろう。

## 6. 焼土遺構

焼土遺構は5~6 tr間中央部のW-3号溝の西に近接して検出された。東西40cm、南北55cmの長円形状の範囲に、黒灰色の灰や焼土塊・焼土粒を多量に含むⅢ層が散布していた。この下からは東西・南北とも43cm、深さ4cm規模の浅い窪みが検出され、これを埋めていた。散布範囲及び浅い窪みの北側は後世の攪乱で削り取られていた。本遺構の検出面はⅤ層上面で、周辺に竪穴式住居跡の床面らしきものは確認されなかった。なお、上記Ⅲ層中から土師器「コ」状口縁表出土。

## 7. トレンチ内出土遺物

遺物は検出・確認された遺構にはほぼ対応する時期のものであり、1~5は竪穴式住居跡等に、6~8は井戸跡やW-3号溝等に対応する。ここで注意すべきは後者についてである。6·7は、井戸跡と共に、本遺跡地に中世の生活空間のあったことを物語るが、8が板碑とすれば更に墓地の要素も加わり、本格的な中世遺跡の存在も推定される。



第15図 トレンチ内出土遺物

(法量単位: cm)

番号	形 様	法量(①表面②口径③底径)	法 量 等	器 上	記 記
1	壺	①6.4(残存高) ②不明 ③13(底径)	(内外面) 体部横穴へラナデ。 内面に粘土被覆。底部と体部の端に凹部。	φ0.1~0.5mm 白色砂質。	①灰白色 ②燒土 ③底面下部の灰白色 ④江戸式 窓枠の跡。窓枠と窓枠の間に有る細縫。長さ約3cm 自然崩れ。
2	灰 瓶	①5.5(残存高) ②不明 ③6.5(底径、復元)	(内外面) 体部へラ伏のロクロナデか。 底部外縁部へラ削り。付高台。	細密、φ0.5mm 底面灰白色。	①灰白色 ②燒土 ③成都70% ④S tr ⑤残存部 無焼結。
3	七脚器 杯	①3.7 ②11.6(復元) ③4.6 (復元)	(外面) 口縁被ナデ。 体部指揮よ。 同下 端部へラ削り。(内部)被ナデ。	φ0.5~1mm長い 石英多量。	①にぶい褐色 ②比較的毛曲 ③5%
4	土器器 高台柄	①2.1 ②13.2(復元) ③6.0 (復元)	(外面) 体部上半横ナデ。 同下半倒い口 アロ目 (内部) 黑色研磨。付高台。	φ0.5~1mm砂粒多 量。	①(表面) 残色、(器内)灰白色 ②灰質 ③20% ④H~8付近。
5	土器器 高台柄	①2.0(残存高) ②不明 ③5.6(底径)	(外面) 体部横ナデか。 底部同側水切り 無網堅。(内部) 黑色研磨。付高台。	細密、φ0.5mm黑色 砂粒多量。	①灰白色、うすく褐色み ②灰質 ③底面20% ④4~5t ⑤陶器張部 ⑥つくり良好。
6	陶 器	①1.4(残存高) ②不明 ③6.0(底径、復元)	両合は削り出し。 並び外縁部へラ削 り。	φ0.5mm白色 黑色砂粒。	①にぶい黄褐色 ②やや軟質 ③成都20% ④5tr ⑤窓枠外側近く全断面崩れ。 滅緑色。
7	漆器器 土 壺	①6.1(残存高) ②不明 ③不明	(内外面) へラ執具による被ナデか。	φ0.3~0.5mm白色 白色砂粒多量。	①墨色(被)、器内灰黄色 ②軟質 ③口縁部 10% ④5~6t 間接系部
8	板 碑	7cm×5cm、厚さ1.1cm		錐把片岩。	⑤残存部分には文字等の刻みはない。

第11表 トレンチ内出土遺物観察表

## VII. まとめ

### 1. 遺跡の立地

本遺跡は、「IV. 基本土層」で前述した如く、西側の低湿地と東側の低地に挟まれた、広瀬川低地帯の微高地に立地する。古墳時代以前から洪水等を受けた形跡はなく、安定した土地であった。この微高地は一定幅で南東方向に延びるもので、その北端付近に本遺跡は位置するとみられた。明治18年測量・参謀本部作成の地形図によると、上記微高地に該当するとみられる水田に挟まれた細長い桑畠地帯がある。この桑畠は本遺跡の北西付近に始まり、所々途切れながらも片貝神社の南方まで、幅100m前後、長さ約1,200m余り続く。片貝神社内の大塚古墳もこの桑畠地帯に属しており、場所によっては現在でも濃密に土師器・須恵器等の散布を示す所がある。

ところで、上記地図で本遺跡周辺の広瀬川低地帯上の集落をみると、いづれもかなりの広さを持つ桑畠地帯の一画に位置している。下沖ノ郷、幸塚村、三保村、東・西片貝村、野中村、上・下長磯村、女屋村等である。この中にはかなり濃密に土師器・須恵器等の散布が認められる所があり、「上毛古墳鑑」掲載の広瀬川低地帯上の古墳の大部分は上記地域にある。これらはかなり広い微高地で、古くから開発の進んだ地域とみられよう。そして微高地周囲の低地は水田として利用されたものであろう。

ところで本遺跡が形成された奈良・平安時代に、利根川はどこを流れていたのだろうか。前橋台地を流れる現利根川は、鎌倅～戦国時代頃には現在地に変流していたもので、それ以前は広瀬川低地帯を流れていたと言われる。それでは広瀬川低地帯のどこを流れていたのだろうか。第16図は前橋市内の古墳分布図である。これによると、広瀬川低地帯では桂萱地区に広く古墳が分布し、赤城南麓の芳賀地区から続いているように見える。一方、現広瀬川沿いには全く古墳のないことが注目される。また、茶木田遺跡は赤城南麓の段丘崖から約800mの所に位置し、これは田口町～岩神町の低地を流れる現利根川幅（河川敷を含む）にほぼ等しいが、本遺跡では



第16図 前橋市内古墳分布図

古墳時代以前から水をかぶった形跡は全くない。赤城神社奈良原家「年代記」にみられたたびたびの洪水記録や、戦後間もないキャサリン台風による洪水等から考えても、もし現利根川が当時の利根川ならば、何らかの影響を受けているのではないだろうか。以上により、旧利根川は少なくとも本遺跡周辺ではすでに古墳時代頃には桂萱地区の西側、現広瀬川付近を流れているものと推測される。明治29年以前には勢多郡と群馬郡の境界を広瀬川に置いたが、これは上記のことを傍証しているものかも知れない。

茶木田遺跡は旧利根川左岸の広瀬川低地帯の微高地

上に立地し、赤城南麓斜面と一帯の地だったと考えられる。また、本遺跡周辺の高地上には同様の遺跡の存在が推定される。

## 2. 穴式住居の年代

本調査で完掘した住居跡は、建物敷地下に入るH-8号住居跡だけである。他の住居跡は確認のみに留めている。出土遺物はH-8号住居跡を含めいずれも覆土中乃至その傾向の強いものであり、必ずしも住居跡の年代を示すものではないが、ここで一括して芳賀東部団地遺跡の土器分類と照合すると下表のとおりである。H-8号住居跡を除き、いずれも小破片で出土数も少ないが、土器傾向及びそれにもとづく集落の存続時期は推定できよう。なお、この中ではH-7号住居跡の土師器が芳賀東部団地遺跡では出土していないが、同種のものが数多く出土している武藏南部や相模地域では、8世紀の前半を中心とする時期に出土しているので、本遺跡でも一応そのころのものと考えられる。遺物が全く出土していないために分類不可能な住居跡についても、覆土や周辺のトレンチ内出土遺物に照らして、下表の範囲内のものとみては間違いないものと考えられる。

芳賀分類	基本型住居跡	年代	備考
H-307号住居		8 C 初頭	
H-283号住居	H-7		
H-294号住居			
H-275(A)号住居	H-6	8 C 中～後半頭	
H-275(B)号住居			
H-271号住居			
H-267号住居	H-8-9-10(H-3)	9 C 中頭	縁柱(H-8)
H-273号住居		10 C 前半	
H-272号住居	H-4	10 C 後半	
H-290号住居			
不明	H-1-2-5		

第12表 住居跡出土土器時期別分類表

以上により、本集落跡は8世紀前半に形成され始め、11世紀前後には終焉を迎えたものと推測される。また、その最盛期は芳賀分類のH-267号住居類の時期とも考えられる。このような本遺跡のあり方は、芳賀東部団地遺跡と極めて類似しており注目される所である。

## 3. H-8号住居跡出土の綠釉陶器について

H-8号住居跡の南西隅付近で、住居跡覆土中から綠釉碗が出土し注目された。東京国立博物館の矢部良明氏によると、黒鉢14号窓式に比定でき、時期は9世紀末期、京都産であろうと鑑定された。H-8号住居跡出土の土師器・須恵器は、芳賀分類のH-267号住居類土器群の後半乃至末期に位置づけられ、綠釉陶器の年代とほぼ一致するものである。

現在までに、奈良・平安時代の彩釉陶器(多彩・単彩)を出土した市内の主な遺跡は、旧利根川西部で元總社明神遺跡<sup>30</sup>、中尾遺跡<sup>31</sup>、鳥羽遺跡<sup>32</sup>、國分寺<sup>33</sup>、國分寺中間地域遺跡<sup>34</sup>、山王庵寺跡<sup>35</sup>、清里南部遺跡群<sup>36</sup>、中島遺跡<sup>37</sup>、下東西遺跡等<sup>38</sup>が、同東部では芳賀北部団地遺跡、檜峯遺跡がある。旧利根川西部の上記遺跡は、国府乃至國分寺等の官衙遺跡の一部又は隣接する地域であり、分布密度の濃さは、これらとの有機的な関連を推測させる。一方、旧利根川東部では上記遺跡周辺に現状では官衙遺跡が確認されておらず、その解釈に問題を残している。しかし、旧利根川西部の官

銘遺跡との関連から考えて、彩釉陶器が階級性を持つことは明らかであり、上記東部地域の遺跡地付近に少なくともその地域の階級的優位者の存在は推定されよう。本遺跡出土の綠釉陶器も、かつて当地域にいた地域的優位者の存在を物語るものとみるのである。

#### 4. 本遺跡における古代集落の性格

8世紀以降の古代集落には3つの類型が設定できる。(1)古墳時代から平安時代まで連続して続く集落。檜峯遺跡<sup>10</sup>、富田遺跡<sup>11</sup>等。(2)奈良時代中頃～平安時代前半が欠如し、その前後に集落のあるもの。草作遺跡<sup>12</sup>、元絶社明神遺跡<sup>13</sup>、熊野堂遺跡<sup>14</sup>等。(3)8世紀前半に始まり、10～11世紀まで続く集落。A) 芳賀東部団地遺跡<sup>15</sup>(東側台地)、上栗須遺跡<sup>16</sup>、二本松遺跡<sup>17</sup>等、B) 清里南部遺跡群<sup>18</sup>、中島遺跡<sup>19</sup>等。これらの集落は、(1)継続型集落、(2)断続型集落、(3)後発型集落とも言える。この内(2)(3)は律令体制の形成乃至完成期に係わっており、関係が注目される。特に(2)は官衙的施設が想定される付近に位置する傾向がある。

茶木田遺跡の堅穴式住居は、8世紀前半に始まり11世紀前後に終っており、(3)の類型に属す。この類型には奈良時代に大型堅穴式住居→掘立柱建物の変遷をたどる小住居群を含むAタイプと、三彩陶器、綠釉陶器、硯等を出土するが掘立柱建物を含まないBタイプがある。このBタイプは現状では日利根川西部の、国府・国分寺に比較的近い所で確認されている。今回の茶木田遺跡の調査では、掘立柱建物跡が検出されないものの(3)～Aタイプの可能性もあり、集落の開始時期、綠釉陶器の存在、立地からみて、有力者を中心とする開発型集落の可能性も大きい。

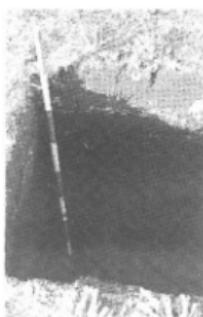
#### 5. 広瀬川低地帯の開発

広瀬川低地帯で実施された発掘調査は現在までわずか2件である。青柳寄居遺跡は昭和58年に調査され、古墳時代以降平安時代以前の水田と、それを切って10世紀後半以降の堅穴式住居跡が検出されている。本遺跡は前記のとおりである。これに古墳や遺物の散布地を加えると、部分的には既に古墳時代に入々の居住があつても、本格的な居住・開発は奈良時代以降と推測される。前橋市国領町の「国領」や、「上野国神明帳」にみえる「小井出明神」「霜河明神」の現在地を考慮すると、平安時代末期の広瀬川低地帯はかなり広範囲に開発が進んでいたのではなかろうか。このころ青柳御厨や細井御厨が広瀬川低地帯をとり込んで形成された可能性は高い。14世紀後半には、既に神(幸)塚、三侯・片貝等は大胡郷の一部となっており、一帯の地とみられる亦城南麓とは交流が深かったものであろう。本遺跡の井戸はこのころのものであろう。

図版 1



調査前全景(南から)



3 tr 西端地層断面



11 tr 地層断面(東南から)



9 tr 地層断面  
(H - 5 号住居跡付近、南西から)



H - 1・6・7 号住居跡確認状況  
(10 tr、西から)



H - 9 号住居跡確認状況と  
土坑・柱穴状ピット群(東から)

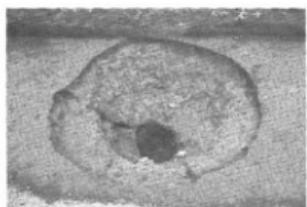
図版 2



H-8号住居跡全景(北から)



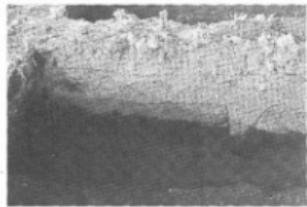
H-8号住居跡遺物出土状況(北東から)



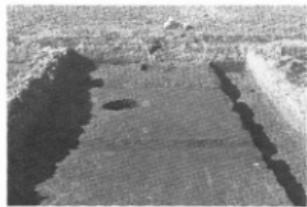
井戸跡(北から)



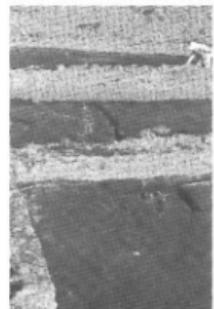
犂土造構(北から)  
—内部の区画縫内は犂土の厚い所—



P-1・2号層断面(5tr、南から)

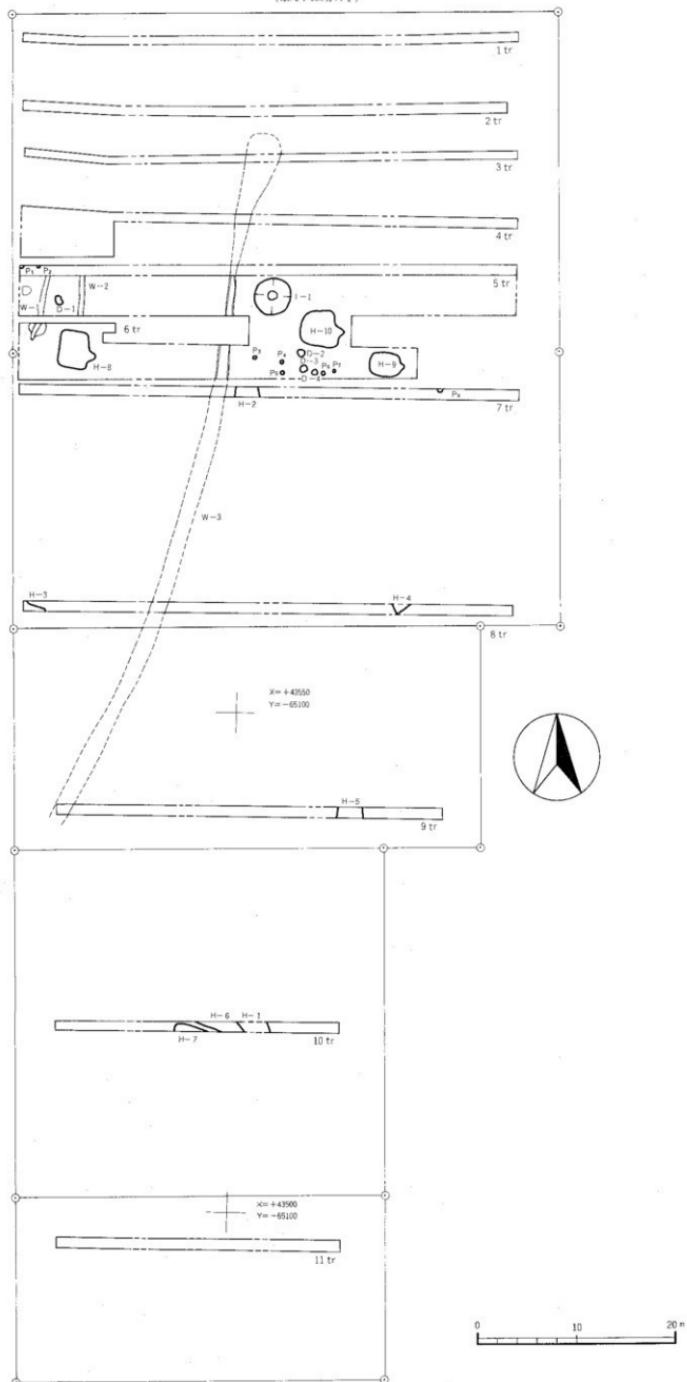


W-1・2号溝、D-1号土坑(東から)



W-1号溝(南から)

(縮尺:400分の1)



茶木田遺跡全体図

## 注

- (1).『前橋市史』第1巻 昭和46年。  
(2).『前橋市史』第5巻 昭和59年。  
(3).a. 参謀本部陸軍部測量局「前橋」2万分の1。明治18年測量、同21年縮刷。  
b. 前橋市都市計画図「前橋7」3千分の1。昭和42年縮刷。  
(4). 前橋市教育委員会『前橋の歴史と文化財』昭和55年。  
(5). (4)に同じ。  
(6). 前橋市教育委員会『前橋田邊跡』昭和58年他。  
(7). 群馬県教育委員会『緊急文化財調査報告書』昭和58年、群馬県住宅供給公社『下新田遺跡』昭和54年他。  
(8). (2)に同じ。  
(9). 設楽博巳『土製耳飾』(『編文文化の研究』9) 昭和58年。  
(10). (1)に同じ。  
(11). 前橋市埋蔵文化財発掘調査会議『青柳寺遺跡』昭和59年。  
(12). 相澤貞順『日輪寺』昭和58年。(1)・(4)に同じ。  
(13)～(16). (1)に同じ。  
(17). 『兩橋村誌』昭和30年、『勢多郡誌』昭和33年。  
(18). 青柳御所は長寛年に成立。經井御所は南北朝以前。  
(19). (3)に同じ。  
(20). 『上毛古墳地図』昭和13年。  
(21). 『伊勢崎風土記』は泰元元年(1303)説。『上野名跡史』は応永年間(1394～1428)説。  
(22). (1)に同じ。  
(23). 『宮城村誌』昭和49年。  
(24). (2)に同じ。  
(25). (1)では、地名、古墳の分布、土層、利根川支流との関係等から、7・8世紀以降の利根川本流を現広瀬川筋に推定している(P.633～635)。  
(26). 前橋市教育委員会『芳賀盆地遺跡群』第1巻。昭和59年。  
(27). 神奈川考古同人会『神奈川考古』第14号。昭和58年。(『シンボリズム』奈良・平安時代土器の諸問題)。  
(28). (4)に同じ。  
(29). 前橋市教育委員会『元経社明神遺跡I・II』 昭和58・59年。  
(30). 群馬県教育委員会『中尾』(遺物編) 昭和59年。  
(31). 鳥居遺跡見学会資料(群馬県埋蔵文化財調査会主催) 昭和57年。緑袖。  
(32). 群馬県教育委員会『国分寺I～III』昭和56～58年。三彩、絆。
00. 前橋市教育委員会『山王庵寺跡第5次発掘調査概報』(昭和53年)他。三彩・絆。
01. 前橋市教育委員会『喜田道跡群・西大室遺跡群・沼田南遺跡群』昭和55年。緑袖。
02. 前橋市教育委員会『中島遺跡』昭和56年。三彩・緑袖。
03. 群馬県史考古同人会『上毛野』1. 昭和59年。緑袖。
04. 東國古文化研究所『まえあし』緑袖。
05. 前橋市教育委員会『櫛峯遺跡発掘調査報告書』昭和57年。三彩。
06. 沢嶋彰一『三彩・緑袖』(日本のやきもの) 昭和51年。
07. 田中琢『平城京』古代日本を発掘する3) 昭和59年では奈良三彩ではあるが、5位以上の者の使用を想像している。
08. 鬼頭清明『古代の村』(古代日本を発掘する3) 昭和60年では、本文中(1)・(3)の2類型があるとする。(2)の類型は溝面積にも係わるが、可能性の高いものと思われる。
09. (2)に同じ。
10. 前橋市教育委員会『喜田道跡』昭和56年他。
11. 前橋市元経社町1322。昭和59年11・12月調査。昭和60年度中に報告書刊行予定。
12. (4)に同じ。
13. 群馬県教育委員会他『熊野堂遺跡』昭和59年他。
14. (4)に同じ。
15. 上栗須遺跡現地説明会資料(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 昭和60年。
16. 前橋市教育委員会『文化財調査報告書』第12巻。昭和57年。
17. (4)に同じ。總。
18. (4)に同じ。總。
19. (3)～(8)類型は、国府や国分寺の側面にあり、遺物からも国家的事業との係わりが強制される。
20. (2)の文献では(3)～(8)類型は開発型墓落とみる。
21. (4)に同じ。
22. (4)に同じ。
23. 三保町、東・西片貝町、下細井町他。
24. (3)の地域の散在土器は奈良・平安時代のものが中心。
25. 尾崎喜左雄『群馬の地名』上巻。昭和51年。国額は12世紀の前半には出現していたものとみられる(石母田正『中世の世界の形成』昭和32年参照)。
26. 尾崎喜左雄『上野国神明帳の研究』昭和49年。
27. (4)に同じ。
28. 長榮寺文書・彦部文書 ((1)に同じ)

## 〔調査作業員〕

新保 一美、中島幸十郎、角田もとえ、中島 つる、横堀 ます、古松英太郎、宮川いちご、阿部シゲ子、岩木 操、下山 卓子、藤塚チエ子、武井美枝子。

## 〔整理作業員〕

新保 一美、森永 保、白井 栄恵、福島 裕子、千明香根子、白田 和泉。



発掘作業のようす

茶木田遺跡(59D-1)

昭和60年3月25日 白刷

昭和60年3月31日 発行

発行 前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目12-1

印刷 株式会社 報 通

前橋市箱田町361-3

## 付図：トレンチ地層断面図

